

## 第五章 資本の異なる運用

資本は本来、生産的労働を支えるためのものであるが、同額でも運用先によって動員できる労働量には大きな差が生じ、ひいては国の土地と労働の年間産出に付け加わる価値にも同様に大きな違いが生まれる。

資本の使い道はおおむね四つに大別できる。第一、社会が毎年要する一次産品を確保すること。第二、それを直ちに使用・消費できるよう製造・加工すること。第三、一次産品や製造品を産地から需要地へ運ぶこと。第四、需要に応じて小口に分けて供給することである。これに対応する担い手は、第一が土地・鉱山・漁場の改良や耕作に従事する者、第二が製造業の親方、第三が卸売商、第四が小売商であり、この四類型から外れる資本の活用を挙げるのはほとんど不可能である。

資本の四つの使い道はいずれも、他の三つの維持と拡大に、また社会全体の利益にとっても不可欠である。

原材料を安定的かつ十分に供給するための資本が投入されなければ、いかなる製造も商業も成り立たない。

大きな前処理を要する粗原料は、製造に資本が動員されないかぎり需要が生まれず、生産も行われない。仮に自生的に得られても交換価値を持たず、社会の富を増やすことはできない。

原料や製品を豊かな産地から必要とする地域へ運ぶ資本がなければ、生産は近隣で消費される量を超えて拡大しない。商人の資本は、各地の余剰を相互に交換可能にし、双方の産業を伸ばして、人びとの暮らしのゆとりを広げる。

原料や製品を需要に応じて小口で供給する資本が投じられなければ、人びとは皆、必要量を超えてまとめ買いせざるを得ない。精肉商のない社会では、牛も羊も一頭単位でしか買えず、富裕層にも不便で、貧困層には一段と過酷である。貧しい職人が一ヶ月分や半年分の食料を一度に買うなら、本来は道具や設備という稼ぐための資本に充てるべき手持ちを、収益を生まない当座の消費在庫に縛り付けるほかない。必要分を日々、時には時間ごとに買える仕組みこそ、こうした人々に最も適しており、手元資金のほぼ全額を資本として働かせ、扱える仕事の価値を広げられ、その利潤は小売の利幅を十分に上回って戻ってくる。ゆえに、商店主や職人を敵視し、課税や人数制限で締め付ける偏見には根拠がない。彼らが増えて公共を害することはなく、あるとしても互いに傷つけ

合うだけである。たとえば食料雑貨の販売量は、その町と周辺の需要が上限を定め、投じられる資本もその仕入れ可能額を超えない。資本が二人の商人に分かれれば、価格は独占より競争で下がり、二十人に分かれれば、競争はさらに強まり、談合の余地はいっそう狭まる。競争で倒れる者が出て、それは当事者の責任であり、消費者や生産者に害はない。むしろ独占に比べれば、小売は安く売り高く買う方向に働く。弱い消費者に不要不急の品を売りつける例はあろうが、その害は公共が介入すべき規模ではなく、人数制限で必ずしも防げるものでもない。庶民の飲酒を広げるのは酒場の多さではなく、飲酒の嗜好の広がりが多いの酒場に仕事を与えるのである。

この四つの形で資本を用いる者は、いずれも生産的労働者である。適切に指揮されたその労働は、手を加えた対象、すなわち販売できる商品に定着し、ふつうは少なくとも自分の生計費に見合う価値を価格に上乘せする。農家・製造業者・卸売商・小売商の利潤は、前二者が生産し、後二者が仕入れて売る品の価格から生まれる。ただし、同額の資本でも、この四類型に配した場合に直ちに動員できる生産的労働の量は大きく異なり、社会の土地と労働の年間産出をどれだけ増やせるかも、使い方ごとに大きく違う。

小売業者の資本は、利潤を含めて仕入先商人の資本を回収させ、営業の継続を支える。

他方で、この資本が直接に雇う生産的労働者は小売業者本人に限られ、その運用が国の年産に加える価値は小売の利潤だけである。

卸売商の資本は、原材料や製品の供給元である農家や製造業者の投下資本を利潤込みで回収させ、その事業の継続を支える。これが、卸が社会の生産的労働を間接に支援し、年産の価値を高める主要な経路である。さらに、この資本は貨物を運ぶ船員や運搬人の雇用も生み、商品の価格には卸売の利潤に加えて彼らの賃金が上乗せされる。以上が、卸資本が直接稼働させる生産的労働と、直ちに年産へ付け加える価値の全体であり、その作用はどの点でも小売資本より優位である。

親方の資本は、まず一部が工具・機械などの固定資本となり、その代金が購入先の職工の資本を利潤込みで回復させる。次に流動資本の一部が原材料の仕入れに充てられ、農家や鉱山業者の資本も同様に利潤込みで置き換わる。とはいえ最大の部分は、年次またはそれより短い周期で、雇用工の賃金として支払われ、材料の価値を賃金分だけ高める。ここに賃金・材料・器具という総投入に対する親方の利潤が加わるため、同額の資本でも、卸資本にある場合より直ちに多くの生産的労働を動かし、社会の年産により大きな価値を付け加える。

同額の資本で最大の生産的労働を駆動するのは農業資本である。雇用労働者のみならず役畜も生産的労働者に含まれる。農業では自然が人と協働し、その働きには費用が要らないが、成果には確かな価値がある。農業の要諦は、自然の肥沃さを人に最も有益な作物へ振り向けることであり、収量増はその帰結である。植え付けや耕起は自然の力を鼓舞するというより、その流れを整え導く営みで、最後の大仕事は常に自然が担う。ゆえに農業の人手と役畜は、製造の職工と同じく自らの消費相当分（資本と利潤）を再生産するのみならず、それを超える価値を付け加える。すなわち農家の資本と利潤に加え、地主の地代まで恒常的に再生産する。地代は地主が貸す「自然力」の産物で、その大きさは自然肥沃度や改良の程度に応じて変わり、人の仕事に帰せる分を控除した残りが自然の寄与であるが、収穫全体の四分の一を下回することは稀で、三分の一を超えることもしばしばである。自然が関与しない製造では、同量の生産的労働からこのような再生産は望めない。ゆえに農業資本は、同額の製造資本より直ちに多くの生産的労働を稼働させ、その労働量当たりでも国の年産（実質の富と所得）により大きな価値を加える。資本の配分先として、社会に最も有利なのは農業である。

農業や小売に投じられる資本は、基本的にその社会の内部にとどまる。稼働場所が主

に農地と店舗に限られ、所有権も通常は（例外はあるが）その社会の住民に属するからである。

卸売商の資本は定住せず、安く買い高く売れる場所を求めて地域から地域へ自由に移動する、いわば流動資本である。

製造資本は製造の場に置かれるが、その場所はあらかじめ定まらない。原料の産地や最終消費地から遠く離れることも多い。たとえばリヨンは原料供給地にも主要消費地にも近くなく、シチリアの富裕層は自国の原料を使いながら外国で織られた絹をまとい、スペインの羊毛の一部は英国で布となってから再びスペインへ戻る。

その社会の余剰を外へ運ぶ商人の国籍は、実務上ほとんど重要ではない。外国人であれば国内の生産的労働者は商人一人分少なく、その利潤が国内の年産価値に残らないだけである。雇う船員や運送業者の国籍は自国・相手国・第三国いずれでもよく、国内商人の場合と同じである。外国資本も、余剰を国内で需要のある品と交換して同等の価値をもたらし、生産者の資本を回復させて事業の継続を可能にする。つまり、卸売資本が生産的労働を支え、年産価値を押し上げるといふ本質的な貢献は、国籍にかかわらない。製造資本は国内にあるほど望ましい。より多くの生産的労働を直ちに稼働させ、年々

の産出価値を大きく押し上げられるからである。ただし国外の資本でも国益に資する場合に少なくない。バルト海沿岸の亜麻や麻を英国で加工するメーカーの資本は、原料産地の国々にも有用である。これらの原料は当該国の余剰であり、現地で需要のある財と継続的に交換されなければ価値を生まず、生産もやがて途絶える。輸出商人が生産者の資本を補って生産を続けさせ、英国の製造業者がその商人の資本を補う、という循環が成り立つのである。

国は個人と同様に資本を欠き、土地の改良・耕作、粗生産物の全面的な製造・加工、余剰の原料や製品を国内で必要な品と交換できる遠隔市場へ運ぶことの三つを同時に賄えないことがある。大ブリテンでも、土地改良と耕作に資本が行き渡らない地域があり、スコットランド南部の羊毛の多くは悪路を長距離運ばれ、地元の製造資本が乏しいためヨークシャーで織られる。英国各地の小製造都市にも、産品を需要のある遠隔市場へ運ぶ資本を欠く所が多く、そこにいる「商人」は実際には大商業都市の富裕な商人の代理にすぎない。

一国の資本が耕作・加工・輸出の三用途すべてを賄えないときは、農業に厚く配分するほど国内で直ちに稼働する生産的労働が増え、土地と労働の年産に加わる価値も大き

くなる。次に効果が大きいのは製造業であり、最も小さいのは輸出貿易に投じた資本である。

耕作・加工・輸出の三つを同時に支える資本がない国は、いまだ本来の豊かさに達していない。とはいえ、資本が不足する段階で三つを一度に進めても、個人の場合と同じく、資本を早く蓄える近道にはならない。国の資本も個人と同様に有限で、達成できる目的は限られる。資本は住民が収入から儉約して積み増した分だけ増え、住民全体の収入を最大にする使い方に投じたときに最も速く増える。なぜなら、住民の収入は土地と労働の年間産出価値に正比例するからである。

アメリカ植民地が短期間に富と規模を伸ばせた主因は、資本のほぼすべてを一貫して農業に投じたからである。製造は、農業に伴う家内の粗製品づくり（各家庭の女性や子どもが担う）を除けばほとんどなく、輸出や沿岸輸送の多くは英国在住の商人資本が支え、バージニアやメリーランドでは小売の店舗や倉庫まで本国商人が所有する例も少なくない（非居住者資本による小売という稀な形である）。もし植民地側が結束や強制で欧州製品の輸入を止め、自国製造に独占を与えて資本を振り向ければ、年産価値の伸びは鈍り、真の富と大国化への歩みも阻まれる。輸出貿易まで自国で独占しようとすれば、



その害はさらに大きい。

人間社会の繁栄は長続きせず、大国でも耕作・加工・輸送の三機能を同時に賄う資本を蓄えることは稀である。中国・古代エジプト・古代インドの富と耕地の記録を最大限認めても、彼らが際立っていたのは農と工であって、対外貿易ではない。古代エジプトには海を避ける迷信があり、インドにも近い觀念が残り、中国も海外商業で特筆すべき実績は少ない。ゆえに、これら三地域の余剰生産の多くは、金銀など現地で需要のある品と交換され、外国商人によって輸出されたと考えられる。

同じ資本でも、国内で農業・製造業・卸売のどれにどれだけ配分するかで、直ちに動員される生産的労働の量も、土地と労働の年産に加わる価値も大きく変わる。さらに、卸売に投じるなら、その取引の種類によって効果の差はきわめて大きい。

卸売取引（再販売を前提とした仕入れ）は、国内商業、消費向け対外貿易、運送（中継）貿易の三形態に分かれる。国内商業は国内の一地域で仕入れ別の地域で売る取引で、内陸・沿岸の両ルートを含む。消費向け対外貿易は国内で消費するための外国商品を買付け、運送貿易は外国同士の取引を仲介して一方の余剰を他方へ運ぶ。

国内の一地域で国産品を仕入れ別の地域で売る資本は、取引のたびに国内の農業と製

造に投じられていた二つの資本を同時に置き換え、双方の操業を途切れさせない。商人の拠点から一定価値の品を送り出せば、通常は同価値の別の品が戻る。双方が国産品である限り、その都度、生産的労働を支える二つの資本が確実に補われ、支援は継続する。例えば、スコットランドの製造品をロンドンへ送り、イングランドの穀物や製造品をエディンバラへ戻す資本は、英国の農業と製造に投じられた二つの資本を取引ごとに置き換えている。

国内消費のために外国品を買い付ける資本は、代金を自国の産出で支払う限り、各取引で二つの資本が回収される。ただし、国内の生産を直接支えるのはそのうち一つだけである。たとえば、英国製品をポルトガルへ送り、見返りにポルトガル製品を英国に受け取る場合、英国内で回収されるのは英国内の資本が一つで、もう一つはポルトガル側の資本である。ゆえに、消費輸入の回転が国内商業と同じ速さでも、国内の産業や生産的労働への効果は国内商業の半分にとどまる。

消費輸入の回転は国内商業に及ばない。国内では資金が概ね一年内に戻り、年三〜四回転することもあるが、消費輸入は年内回収が稀で、二〜三年を要することも珍しくない。したがって同じ資本でも、国内商業は消費輸入が一回転する前に最大十二回転する

うえ、国内商業は一度の取引で国内の二つの資本を再生するのに対し、消費輸入は一つだけである。総合すると、国内商業の資本は、消費輸入の資本に比べ、国内産業を支える効果が最大二十四倍に達し得る。

国内で消費する外国品が、国産ではなく別の外国品で決済されることがある。だが平時には、その外国品も直接または複数の交換を経て、結局は自国の産物で賄われている。ゆえに、この迂回型の消費輸入に投じる資本の働きは、最も直接的な取引と本質的には同じだが、資金の戻りは遅くなる。二ないし三の独立した対外取引の回収を待つからである。たとえば、リガの亜麻・麻を、英国製品で得たヴァージニア産タバコで支払うなら、同じ資本で英国製品を再仕入れするまで二件の回収を要し、タバコの代わりに英国製品で得たジャマイカ産砂糖やラムで支払うなら三件を待たねばならない。この連鎖を二〜三人の商人が中継して各自の回収を早めても、貿易全体に投じた資本の最終回収速度は変わらない。国全体の観点では、資本が一人に集中しているか三人に分かれるかは差がない。英国製品と亜麻・麻を直接交換する場合に比べ、同価値を間接に取り替えるにはおよそ三倍の資本が要るからである。したがって、この迂回的な消費輸入に回した資本は、同規模のより直接的な取引に回した場合より、国内の生産的労働を後押しする

力が弱い。

国内で消費する輸入品をどの外国品で決済しても、取引の性質も本国の生産的労働への寄与も本質的には変わらない。ブラジルの金やペルーの銀で支払う場合でも、それらは結局、本国の産業の産出物、またはその産出で得た別の品で購入されているからである。ゆえに、生産的労働の観点では、金銀を介した消費輸入は、同程度に迂回的な他の消費輸入と利害も資本回収の速さも同じである。むしろ金銀は高価で小容積のため運賃も保険料もかさまず、損傷の危険も小さい。その結果、同額の輸入を他の外国品經由より少ない本国産出で賄える場合が多く、国内需要をより完全に、より安く満たし得る。もっとも、金銀の継続的流出が別の意味で本国を貧しくし得るかどうかは、後段で検討する。

回送貿易に投じられる資本は、自国の生産的労働から離れて他国の生産を支える。一路の航海で二つの資本を置き換えるとしても、そのいずれも自国資本ではない。たとえば、オランダ商人がポータランドの穀物をポルトガルへ運び、代わりにポルトガルの果実やワインをポータランドへ返送すれば、置き換わるのはポータランドとポルトガルの資本であり、オランダに定期的に戻るのは利潤だけで、同国の年々の国富への寄与もその利潤

分に限られる。もちろん自国船・自国船員で運べば、運賃の一部が国内船員の賃金となり、国内の生産的労働もある程度は動くが、これは回送貿易の本質ではない。実際には、オランダ資本が英国籍の船を用いてポーランド・ポルトガル間を運ぶことも普通にある。この事情から、船員と船舶の量が国防の要となる英国のような国では回送貿易が有利と見なされがちだが、同額の資本で雇える船員や船の数は取引の種類よりも、貨物の嵩（価値に対する体積）と港間距離、とりわけ前者に左右される。実際、ニューヨーク・ロンドン間の石炭輸送は距離が短いにもかかわらず、イングランドの回送貿易全体より多くの船腹を要する。ゆえに、特別な優遇策で資本を回送貿易に過度に向けても、自国の船隊規模が必ずしも拡大するとは限らない。

したがって、同じ資本なら、国内取引に投じる方が消費輸入に回すよりも、より多くの国内の生産的労働を動かし、土地と労働が生む年産価値を大きく高める。加えて、消費輸入に回した資本は、同額を回送貿易に用いる場合よりも、今述べた二点でなお優位である。国家の富と、それに支えられる国力は、結局は課税の基礎となる年産価値に比例する。ゆえに、経済政策の主目標は自国の富と力の増進に置くべきであり、この観点から、消費輸入を国内取引より、また回送貿易を他の二類型より、特に優遇してはなら

ない。自然な資本配分を超えて、これら二つに過大な資本を押し流すような強制や過度の誘導は慎むべきである。

ある産業の産出が国内需要を上回れば、その余剰は輸出して国内で求められる他の品に替えなければならない。そうしなければ一部の生産が止まり、国の年産価値は低下する。英国では土地と労働が通例、穀物・毛織物・金物を内需以上に生み出すため、余剰は輸出し、国内需要品との交換が不可欠である。輸出してこそ、余剰は生産費用と労力を償える価値を持つ。海岸線や可航河川の河畔が産業に有利なのは、余剰の輸出と需要の強い別商品との交換を容易にするからである。

国内の余剰で買い入れた外国品が内需を超えるときは、余りを再輸出して国内でより求められる品に替えなければならない。たとえば英国は、自国産業の余剰でヴァージニアとメリーランドから毎年約九万六千ホッグスヘッドのタバコを購入するが、国内需要は約一万四千にすぎない。残る八万二千を再輸出して国内で需要の高い品に置き換えられなければならない。タバコの輸入は直ちに止まり、その支払いに充てる英国製品の生産、すなわち当該部分の生産的労働も止まる。国内の土地と労働が生んだ財は、内外の市場を同時に欠けば、やがて生産を続けられない。ゆえに、たとえ回り道の消費輸入であっても、

国内の生産的労働と年産価値を支えるうえで、最も直接的な取引に匹敵する重要性をもつ。

一国の資本が国内の消費供給と生産的労働に使い切れない水準まで蓄積すると、余剰は自然に回送貿易へ流れ、他国間の輸送や仲介を担う。回送貿易は豊かな国富が生んだ結果・徴候であり、原因ではない。にもかかわらず、特別の優遇で回送を押し上げる政策は因果を取り違えている。実例として、面積・人口比で欧州随一に裕福なオランダが最大の回送シェアを持ち、英国もそれに次ぐ持ち分を有するが、英国の「回送」と称される取引の多くは、実は遠回りの消費輸入である。東西インドやアメリカの品を欧州各市場へ運ぶ取引が典型で、代金は概して英国の工業生産（またはそれで調達した他品）で支払われ、最終的な戻りは英国で消費される。これに対し、英国に固有の正統な回送は、英国籍船による地中海各港間の航路や、英商人が担うインド諸港間の輸送が中心である。

国内取引とそこへ投入できる資本の大きさは、国内の遠隔地域どうしが交換する余剰産物の価値の合計で定まる。消費目的の対外貿易の規模も、国全体の余剰産出と、それで手に入れられる価値が上限である。これに対し、回送貿易の規模は世界各国の余剰産

出価値に依存するため、潜在的な拡大余地は他の二類型よりはるかに大きく、最大級の資本を吸収し得る。

資本の配分は資本家の私益に従い、農業・製造・卸小売のいずれに資金を投じるかは、社会の労働動員や年産の増加とは通常無関係である。ゆえに、もし農業が最も高利で耕作・土地改良が富への最短路である国なら、資本は自然に社会に最も有利な配分となるはずだ。ところが欧州では、農業の利潤が他部門を明確に上回るとは言い難い。近年喧伝される「耕作・改良は巨利を生む」との説に反し、商業や製造ではしばしば一代にして、時に小資本や無資本からでも巨財が築かれるのに、同期間・同規模の農業で同等の成功例は今世紀の欧州では稀である。それでも欧州の大国には良質な未耕地が残り、既耕地にも改良余地が大きく、農業はなお大幅に資本を吸収し得る。それにもかかわらず、政策は都市の商工に偏り、人々が足元の肥沃地の改良よりも、はるか遠方のアジアやアメリカとの回送貿易に資本を振り向けるのはなぜか。その制度的・政策的背景は、後の第三編・第四編で詳述する。